ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.7 July 2021

7

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
  海外布教の中でぢばを考える①
  ／永尾　教昭 …… 1
- 「おさしづ」語句の探求（47）
  「おさしづ」第７巻における教会事情と「道」
  ／澤井　治郎 …… 2
- 台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（２）
  台湾社会の多様性と複雑性
  ／山西　弘朗 …… 3
- ライシテと天理教のフランス布教（25）
  ワクチン接種が進むフランスの現況
  ／藤原　理人 …… 4
- 日本語教育と海外伝道（36）
  日本語教育と異文化伝道①
  ／大内　泰夫 …… 5
- 宗教伝統における聖典の意味構造（７）
  「語られる聖典」としての儒学テクスト
  ／澤井　義次 …… 6
- イスラームから見た世界（13）
  イスラームの聖地巡礼―コロナ禍のマッカ―
  ／澤井　真 …… 7
- 遺跡からのメッセージ（71）
  大和の文化遺産を学ぶ⑨－天理参考館の収蔵資料を活用した唐古・鍵遺跡の再評価
  ／桑原　久男 …… 8
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（38）
  ドゥニ・サス＝ンゲソ大統領①
  ／森　洋明 …… 9
- 現代宗教と女性（32）
  ケア・フェミニズムの提唱
  ／金子　珠理 …… 10
- 図書紹介（123）
  澤井真著『イスラームのアダム』
  ／堀内　みどり …… 11
- おやさと研究所ニュース …… 12
  第339回研究報告会／マイグレーション研究会で研究発表

巻頭言

海外布教の中でぢばを考える①

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

天理教の教理の中で最も重要と言ってもよいものが、「ぢば」への信仰であろう。当然海外の地で布教を進める中でも、ぢばの存在を教え、その意味を説いていかねばならない。ただそこには、海外ならではの難しさもある。しばらく号を跨いで、そのことについて考えてみたい。

ぢばとは、天理教教会本部神殿の中央に位置し、「かんろだい」と呼ばれる木製の柱状の台が据えられている地点を指す。天理教の最重要祭儀であるかぐらづとめは、このぢばを囲んで勤められ、それ以外の場所で勤められることはない。

教理では、ぢばは親神が人間を創造された元の地点である。ここから、ぢばに参拝することを、いわば人間がそのふるさとに帰ることに譬えて「おぢば帰り」と称する。同時に、ぢばは天理王命の神名を授けられたところである。それゆえ、信者の礼拝の目標であり、救済の源泉の地点でもある。教祖は、「月日のやしろ」であり、立教以降のその言動はすなわち親神のそれである。つまり、「地上における“月日の社”と“元なるぢば”とは、（略）云わば地上における天理王命の“動”と“静”との姿」[(1)]である。

もともと教祖がこの「ぢば」という言葉を用いた際、特殊な意味の言葉として使ったのではなく、地場産業などという場合と同様、普通名詞として使用している。これに「この世の元の」あるいは「神のやかたの」などといった修飾語を付けてその意味を明らかにしていった。それがやがて、「おさしづ」で、例えば「ぢばがありて、世界治まる」（M21.7.2）などのように、「ぢば」と独立して使われ、やがてこの言葉が単独で特別な意味を持つようになる。現在、信者の間でも「ぢば」と言えば、天理教の固有の教語として使われている。

世界中に聖地と言われる場所は多くある。ユダヤ教におけるエルサレムやカトリックにおけるルルド、イスラム教におけるメッカ（マッカ）、日本の真言宗における高野山などもそれに数えられるだろう。

ただ、天理教におけるぢばの意味は、それら一般的な聖地とやや趣を異にする。ぢばが人類が宿しこまれた場所といった教理上の意味もさることながら、天理教教団の行政上のぢばの意味（無論、それも教理からそうなったのであるが）が、他の宗教における聖地のそれと違うと思われるからである。

ぢばは、上に述べたように厳密には天理王命の神名を授けられた場所であり、人間創造の場所一点を指すが、広義においては様々な意味がある。信者の日常の信仰生活の中で、しばしばその広義の使い方がなされる。

まず天理教教会本部を言う。この本部という言葉も２つの意味があり、「本部に参拝する」というように①神殿を指す。「おさしづ」には「鏡屋敷ぢば」（M24.5.13）とあり、神殿とぢばが同義となっている例がある。また、②教団の中枢部、ヘッドクォーターを本部と言い、この意味でぢばと表現される場合が多い。例えば本部の勤務者として働くとき「おぢばで勤める」などと言う。また教団の方針などを「ぢばの声」などと表現する。

さらに③大きく神殿の周辺を含む一帯などを指して、そう呼ぶ場合がある。例えば、天理高校や天理大学を「おぢばの学校」と表現したり、本部周辺の天理市内に住むことを「おぢばに住む」とも表現する。この場合「親里」と同義である。

このうち、②教団のヘッドクォーターを「ぢば」と表現することは、慣習でそうなったと言うよりも、教理上必然性がある。天理教では聖地であるぢばと教会本部が不離一体でなければならない。これは天理教信仰の特徴の一つであろう。

［註］（１）中山正善著『続ひとことはなし その２』（天理教道友社、1957年）

「おさしづ」第７巻における教会事情と「道」

天理大学人間学部講師
おやさと研究所兼任研究員
澤井　治郎 *Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第７巻・補遺（明治20～40年）における教会事情の伺いに現れる「道」の用例を整理する。第７巻・補遺は、改修版が公刊される際、新たに収集された「おさしづ」がまとめられている。そのほとんどは個人の身上・事情についての「おさしづ」で、明治35年以後のものは少ないのが特徴である。

このなかに、教会事情に関する「おさしづ」が95件（内、巻末にまとめられているのが72件）ある。そのうち、「道」が用いられるのは11件（内、巻末に２件）、３回以上「道」が繰り返し用いられるのは４件である。

「道」の用例がある「おさしづ」の割書は次の通りである。

①京都元斯道会講社の儀に付伺（21・6・30）
②遠江分教会再願の旨七月十一日のおさしづにより見合わせ居たる処、更に再願の伺（21・8・9）
③斯道会講社の伺（21・-・-）
④和爾部内に頂きしおさしづ（22・3・26）
⑤郡山分教会山城講社取り堅めの願（24・1・13）
⑥兵神分教会教祖五年祭本月二十三日の願／これまで講社にて祀り居る社破損に及び、新たに社を拵えて赤衣を祀り度く願（24・3・21）
⑦平野講社周旋人二、三名出直しに付、心得のため伺（24・10・1）
⑧深谷源次郎分教会所そばへ普請願／同派出の願（25・3・25）
⑨南海分教会事情願（30・3・18）
⑩郡山役員川合安吉熊本地方へ派出願（24・11・30）巻末
⑪五條支教会事務所建築願（25・12・6）巻末

ほとんどが明治25年までのものである。この巻の教会事情の件数自体が少ないので確定的なことは言えないが、「道」という言葉はこの時期に多く用いられていることを示すように思われる。これまでに行ってきた６巻までの「道」の用例整理からも、その傾向を見て取ることができる。

だん〳〵道のため運べば、何時なりと許し置こう

第７巻においても、巻末に教会事情の「おさしづ」がまとめられている。それはすべて短い言葉で、種々の教会上の願いに対して「許し置く」と言われている。この巻では、上記のとおり、巻末にまとめられた教会事情の伺い２件で、「道」が用いられている。

「一つの心一つの理運んで、又一つ治めて、だん〳〵早く一つという心だけは許し置こう。だん〳〵道のため運べば、何時なりと許し置こう。」（⑩⑪）

この「おさしづ」においても「許し置こう」と言われているが、そこに「だん〳〵道のため運べば」という言葉が付いている。この言葉の意味は、もう少し具体的に、どのように読めば良いであろうか。

この巻には、類似した言葉が使われた「おさしづ」がある。

「これから先の処、だん〳〵に道を付ける。前々の道を聞き分けにゃならん。世界の道も十分の道も通し来た。一つやしきの理を治めて、それから先には皆それからそれ、だん〳〵と治まる。一つ名を下ろすなら、末代の印と成る。この所、名を下ろして一つ定める。これでこそと、世界から成程の者やと言うであろ。そしたら神が持って行くで。」（さ21・8・9　②）

ここでは「だん〳〵に道を付ける」と言われ、その仕方が説明されている。「前々の道」を聞き分けて、まず、ぢばの理を治めること、その先は、そこからだんだんと治まると諭される。ぢばから名称が下ろされれば、それは末代の印となる。その名を各所に定めて通れば、世界から成程の者やと言われるようになる。そのようにして、「だん〳〵」と道が付くと教えられている。ここには、ぢばを元として各所に伸びる「道」の順序が説かれていると理解することができる。この「おさしづ」が伺われた頃は、まだ、教会本部が東京からおぢばに移されて間もなく、おぢばでの開筵式も済んでいない状況であったことから、特にこのように順序が説かれたとも考えられる。

天然自然と言う道

「だん〳〵道のため」という言葉には、こうした元と先とでもいうような「道」の順序が含意されているとともに、次の言葉のように時間的な段階をも含意しているように思われる。

「神一条々々々というものは古きの処の道があるで。天然自然と言う道。二年経てば二年の道、三年経てば三年の道を見えるで。」（さ21・6・30　①）

神一条には古きの処の道があり、教祖の時代から、徐々に、年限をかけて道が見えるようになってきた。それを「天然自然と言う道」と表現されて、一気呵成に運ぶのではなく、先長く「天然自然と言う道」をコツコツと、あるいは「だん〳〵」と、歩みを進めるべきことを教えられている。

生涯末代

そうして通っていれば、「尽しただけの理、運んだだけの理」は十分受け取っていると言われる。

「生涯末代事情、生涯末代事情なら軽き話やあろまい。尽しただけの理、運んだだけの理、十分蒔いたる種であるから、皆蒔いた種は、これから十分心寄り合うて、一つ大層なる理は、十分受け取りたる。中に余儀無く事情ある。余儀無く事情は一寸は行かん。道のため、これ運び合い尽し合い、互い〳〵である。これから道作り上げて運ぶなら、見えて来る。これまで大層ありた〳〵。どうなろうと思た日あろ。これから十分治まる〳〵。これから日々楽しんでくれ。」（さ30・3・18　⑨）

そうして日々歩みを進めているなかにも、「余儀無く事情」は起こってくると言われる。しかし、道につながる互いが、道の元にある教祖のひながたに学び、運び合い、尽くし合って通るなら、これから十分治まると諭される。

以上、第７巻の教会事情の「おさしづ」における「道」の用例を確認してきた。そこでは、「道」の順序を心に治め、「道」につながるお互いが、運び合い、尽くし合って通ることを諭されている。

台湾社会の多様性と複雑性

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　ジュニア・フェロー
山西　弘朗　*Hiroaki Yamanishi*

台湾留学と台湾社会への視線

思いがけず、大学の初修外国語として中国語を学び始め、卒業要件に必要な４単位は１年で取得することができたが、先生の影響もあり、しだいに中国語への興味が湧き上がってきた。２年生からは単位取得に関係ない聴講生として、いくつかの中国語に関する授業に出席し、中国語運用能力を向上させることにした。そうした中で、華僑華人について文化人類学的研究をする中国人の先生と親しくなった。先生は幼いころから中国琵琶を習い、のちにプロの琵琶演奏者として活躍されたユニークな経験を持ち、筆者も楽しみながら中国語だけではなく中国文化も学ぶことができた。「どうも日本ともアメリカとも異なる世界が、中国語圏には広がっているらしい。」このような好奇心で、２年生の終りごろから、中国語圏への留学を希望するようになっていった。

当時、香川大学から留学できる交流協定校は中国と台湾にあったが、筆者は香川大学から初めての交換留学生となる台湾の国立政治大学へ留学することにした。政治大学は台湾を代表する名門大学の一つである。国民党が1927年に南京で設立した中央党務学校を前身とし、1937年の日中戦争勃発によって重慶へ移転し、その後1954年に台北で再び開校された歴史を持つ。初代校長は蒋介石、まさに国民党と歴史を共にしてきた大学である。大学名からして、日本にはないユニークな学校なのだろうと、初めての中国語圏への留学に期待を膨らませた。筆者は2005年９月から１年間交換留学することになった。

政治大学は台北市の南端、自然に囲まれた文教地区に位置し、包種茶などの茶葉の生産地として有名な猫空（マオコン）のすぐそばにある。猫空の茶畑には茶芸館があり、お茶を使った料理や、お茶を楽しむことができることから、台北市民の週末の行楽地としてにぎわっている。

この自然豊かな環境とは対照的に、筆者が台湾について感じた印象は「カオス（混沌）」である。中国語は声調という複数の発声法があるため、日本人には大声で叫んでいるように感じるが、それに混ざって、時折「台湾語（閩南語）」も聞こえてくる。さらにまた、台湾は「客家語」を話す人々もいる多言語社会である。日常生活のすべてが紛争や交渉の連続のように感じられた。台湾に到着して数週間はこのような光景を「活気があるなあ」と一種の羨望の眼差しで見つめていたが、しだいに「疲れる」と感じた。なぜこんなに疲れるのだろうか？　この原因は単に言語の違いによるものだけではなかった。

当時の台湾は1990年代から李登輝総統によって進められた民主化後、2000年に初めて政権交代が実現し、戦後長く続いた権威主義的な一党独裁の国民党の支配が幕を閉じ、民主化運動を進めた人々を中心とした民進党の候補として陳水扁が総統に当選したのである。筆者が台湾へ留学したのは、陳水扁総統が選挙遊説中に銃撃を受けて負傷するというショッキングな事件が起き、辛うじて２期目の総統選挙に当選したころであった。立法院では依然少数与党で、党内からの批判もあり、政権基盤は不安定、おまけに家族の汚職問題などのスキャンダルで、政権が大きく揺れていた。さらに総統自身による国民党やその支持者への憎悪を扇動するような言動が台湾社会そのものに亀裂を生み出しているようにも感じさせた。それほど、台湾社会では国民党と民進党双方の支持者が激しく衝突し、政党支持が鮮明な新聞やテレビなどのマスメディアはさらに対立を煽っていた。このような日常が筆者を疲れさせていたのである。

台湾先住民という視点

筆者は留学中、午前は大学内の語学学校に通い、午後は大学の授業に出席していたが、たまたま履修した一般教養科目である「台湾原住民」の授業を通して台湾社会を見つめる眼が大きく変わることとなった。台湾の歴史とはまさに台湾先住民の歴史である。台湾で「原住民」と呼ばれる台湾の先住民は、明朝末期や清朝後に、中国本土から台湾へ大量移住した漢人とは、全く異なる文化を持つ民族である。しかも、台湾先住民族と総称される民族は、現在台湾の中央政府が認定しているだけでも16族あるが、全部あわせても台湾全人口の2%ほどしかいない。しかし、これらの台湾先住民族は、それぞれの社会制度、言語、文化は異なっており、多種多様である。さらに、彼らにはもともと文字がないため、日本の統治下で日本語を国語として教育されるまで、自ら文字によって記録するということがなかった。つまり、日本統治期までの台湾先住民に関する記録はすべて他者によるものなのである。

筆者に台湾社会をカオスのように感じさせた、眼前の民進党と国民党による政治闘争も、台湾先住民の視点で見つめれば、漢人による単なる内輪もめにすぎない。どちらにせよ中国大陸にルーツを持つ人々の利益をめぐる争いなのである。結局のところ、日本統治期に台湾に居住していた漢人である「本省人」も、第二次世界大戦後に国民党とともに移住してきた人々である「外省人」も、先住民から見れば外来の侵略者に過ぎない。こういう一種の冷めた眼差しが台湾先住民にはあるように感じた。さらに、筆者が台湾先住民との交流を通して、彼らの社会や文化の中に、半世紀にわたる日本統治による影響が大きいこともわかった。各民族言語の中で多用される日本語からの借用もさることながら、生活様式や価値観まで、高齢者になればなるほどその影響は強く受けているのである。筆者の知らない日本の歴史が、先住民社会には存在していたのである。

「台湾先住民」、この台湾社会を見つめる視点を根底から覆すような可能性を秘めた人々の存在に、筆者の好奇心はそそられた。われわれが考える台湾をめぐる常識が常識ではなくなる、多数者である漢人の視点も危うくさせることさえあるような、未知の世界。そのような世界が中国語圏である台湾の非中国語圏である先住民にあるのだ。筆者は台湾先住民を研究する価値をそこに見出したのである。

台湾とは何なのか？　台湾人とはだれなのか？　台湾社会とは何を指すのか？　台湾の歴史とはどのようなものなのか？　筆者が留学を通しておぼろげながらも導き出してきた台湾をめぐる常識のすべてに対して、疑問符が刻印されていったのである。

台湾社会の多様性と複雑性の原因は、この「族群（エスニック・アイデンティティ）」と「歴史の複雑性」なのである。

ワクチン接種が進むフランスの現況

天理教リヨン布教所長
藤原　理人　*Masato Fujiwara*

閑話休題。ライシテの歴史から少し離れフランスの現状について書きたい。

昨今、ネットの情報で確認する限り、日本でもワクチン接種の話題が大きくクローズアップされている。フランスもワクチン接種が進み、全土で2,500万人以上が接種を受けている。6,700万人の人口であるから、4割近くの人が少なくとも1回目の接種を終えたことになる。フランスでは夏が近づくと必ずバカンスの話になるが、今の時期に1回目を受けると2回目接種がバカンス時期に重なるという心配をする人もいる。フランス人が接種会場に次々と足を運ぶのも夏の休暇を思う存分楽しみたいからだという人もいる。たしかに接種希望者は多い。筆者は中等教育に従事しているため、5月24日から優先的に予約できる権利があり、アプリやネットで日々チェックしていたが、刻々と予約状況が変化するらしく、なかなか簡単には予約できない状態だ。

アストラゼネカ社のワクチンへの不信感などもあって、当初は消極的だったフランス人の考えも変わってきている。2月には49%が接種を希望していたが、5月には65%に上昇。希望しない人は30%から20%に減った（とはいえ陰謀論者やAntivaxと呼ばれる反対派はフランスにもいる）。

筆者の友人や職場の同僚も接種した人は多い。多くの町で体育館などを利用した接種センターが開設されている。拙宅近くのセンターで接種した友人の話によると、受付から接種後の経過観察まで実に手際よく対応していて、待ち時間はほとんどなかったという。

アストラゼネカとジョンソン＆ジョンソンの接種は55歳以上に限られるものの、5月31日からは18歳以上にファイザーとモデルナの接種が可能となり、6月15日からは保護者の承諾があれば12歳以上18歳未満でもファイザー製ワクチンが接種できる予定だ。これでさらにワクチン接種が加速するだろう。

6月2日TousAntiCovidというアプリで確認したところ、一時は優に100%を超えていたフランスの重症者病床占有率は56%まで下がり、実行再生産数は0.88、10万人当たりの感染者数は91人と、どれもロックダウン期と比べると大きく減少している。5月19日に3度目のロックダウンが終わり、筆者の住むリヨンでも街中のテラスはカフェを楽しむ人であふれている。

6月9日からは衛生パス(Pass sanitaire)と呼ばれるシステムが実施されて、すでに1,700万回以上ダウンロードされている上記アプリが使用される。アプリにはワクチン接種済み、コロナ感染後の回復証明、PCRテストや抗体検査の結果が記録される。1,000人以上のコンサート、スポーツや文化的行事、見本市などイベント会場の入り口に表示されるQRコードを読み取ることで感染者の追跡を可能にする。アプリを通じてのプライバシー侵害を懸念する人は紙の証明書も使用できるが、デジタル化によって興行主側の作業は楽になるだろう。また、欧州レベルでは7月1日に同様のシステムが導入されて、実施になればヨーロッパ域内の移動がしやすくなる。メディアでは欧州各国のPCR検査の費用を報じるなど、夏のバカンス期は人の流れが大きくなることが予想される（フランスはヨーロッパでも珍しく無料でPCR検査ができる）。まだ次の爆発的感染に対して予断を許さないとはいえ、このように出口が見えてきていると感じられるのは明るい材料だ。

以下、個人的に思うところを書きたい。

新型コロナ発生以降、科学者会議の言葉をもとに政策を決定しているという点を強調してきたフランス政府には、少しうがった見方をすれば責任を科学に押し付ける思惑を感じもしたが、それだけ科学の力は国民を説得できるということだ。しかしながら専門家であれ有識者であれ、だれの言葉を信じていいのか分からなくなっている一面もあるだろう。そしてワクチン推奨政策をフランス国民が受け入れつつあるという現実は、副反応など科学的にまだ解明できていないことも、確率の問題として許容していることを示している。COVID-19はこうした不確実性の問題（言い換えれば一種の賭け）を、かつてなかったほど大多数の人に対して強いている。

起源も分からないウイルスの対応について不確実な要素を抱える中、信仰者たちは信仰実践によっていったいどのような力を得られるのだろうか。祈れば救われる超常的な力なのか、信じられる人や歩むべき道を正しく見抜ける直観力なのか、自ら選択した治療法によって自身の身に悲劇が起こっても泰然自若を貫ける達観力なのか、精神の鍛錬によって向上させる身体的な耐性や免疫力なのか。宗教の教えの特徴や個々人の心的感受性によって答えは変わってくるだろう。

事故があってものちに責任の所在を問えるかどうかが分からないコロナワクチン接種の意思表示のように、私たちはこれまで以上に個人の決断が重要な時代に入っているように思う。そうした不確実性のある問題における個々人の決断のプロセスには、上記のような信仰実践が再び存在感を示す余地があると思う。ただ、宗教が現代人に説得力を持って語りかけるには、宗教と科学の共存という大きなテーマではなくとも、信仰者自身に信仰実践を科学的に見つめる目が不可欠のように思う。フランスはライシテの歴史において科学と宗教を対立するもののように扱ってきたが、現代の宗教は信仰の中に科学を活かさなければ人々の心に届かないだろう。

[参照インターネットサイト]
(リンクは2021年6月2日時点)

フランスアンフォHP「COVID-19ワクチンに信頼をおきつつあるフランス人」
https://www.francetvinfo.fr/sante/maladie/coronavirus/vaccin/vaccin-contre-le-covid-19-les-francais-de-plus-en-plus-convaincus_4632875.html

フランス政府HP　衛生パスについてのQA集
https://www.gouvernement.fr/pass-sanitaire-toutes-les-reponses-a-vos-questions

欧州議会HP　EUデジタルCOVID-19証明書
https://ec.europa.eu/info/live-work-travel-eu/coronavirus-response/safe-covid-19-vaccines-europeans/eu-digital-covid-certificate_fr

日本語教育と異文化伝道①

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

日本語教育での学習指導要領

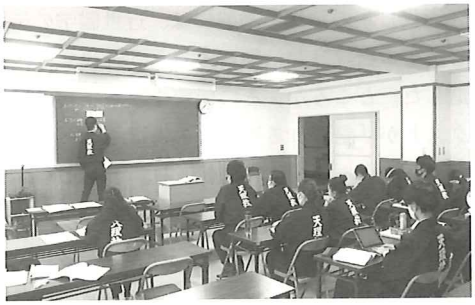
ずっと以前の話だが、会議で日本語科の教員はいつも授業準備で忙しいとか教案作成で残業が多いと言われたことがある。日本語を教えることに専念して、天理教海外部全体の業務、あいは行事の手伝い、当番などに非協力的だと思われていたのかもしれない。しかし、次の日の授業までに準備を済ませておかないと、授業中に混乱するのは本人や学生である。１人の教員が授業に出ている間に他の教員が次の授業の準備をするのであるが、教える項目について参考図書などを丹念に調べ、短時間の導入で理解させ、たくさん練習できるように知恵を絞らなければならない。そのため、限られた勤務時間内で終われないことも多い。それで勤め始めて３年目位までは残業続きということにもなるのだが、なかなか理解が得られなかったようだ。「いったいいつまで教案を書かなければならないのか。何とかできないものか」、「中学・高校のように文科省の学習指導要領のように、それに従って授業を進めていけばいいのではないか」とも言われた。しかし、日本語教育では文科省からの学習指導要領が明確にあるわけでもなく、多様化している日本語教育の世界では個々の日本教育機関に統一した指針を示すのも難しい。何とかできないものかという思いだけがいつも頭にあった。

参考教案

標準的な教案があり、それを元に新人教員が授業準備を進めれば確かに時間の節約になり、教授面でも教えこぼしなども防げて、大きなメリットがあると言える。筆者の学校では新人教師の育成、天理大学の日本語教員養成課程の教育実習、あるいは海外の拠点で行われている日本語学校・日本語教室へ派遣される研修生向けに、限られた時間の中で教案準備ができるようにベテランの教師が中心になって参考教案を作成した。これはスリーエーネットワークから市販されている教案集で有馬俊子『日本語の教え方の秘訣』（上下２巻）という本を参考に作成したものである。この教案書は、海外技術者研修協会で技術研修生の日本語学習用に開発された『新日本語の基礎』という教科書に準拠したものであるが、その後、一般の日本語学習者向けに開発された『みんなの日本語』とは扱っている語彙にも違いがあり、天理教語学院で新たに『みんなの日本語』に準拠した形で作成した。

現実は甘くない

出来上がった参考教案であるが、これさえあれば授業がうまくできるというものではない。あくまで「参考教案」である。これも以前の話だが、海外拠点の日本語教室に派遣される研修生の模擬授業で、担当する課の参考教案を配布し、これをもとに自分で授業を組み立て、他の研修生は学生役になり模擬授業を行った。ある研修生は何度も読み込んでシミュレーションし、自分で考えて加筆や修正を行い、あるいは実際に話すセリフまで書き込んでいたが、書いてある通りにすればいいのだと特に準備もせずに教壇へ上がった研修生もいた。結果は言わずもがなだが、後者の研修生はただ参考教案に書かれてある内容を読むだけで、後で振り返りをしている時に、他の研修生から「わかりにくかった」、「何をすればいいのか指示もわからなかった」などと厳しい指摘を受けていた。つまり書かれていることをそのまま読むのではなく、教員が実際に教室内で発話するセリフ、あるいはジェスチャーや細かい指示などを自分の言葉で補わなければ、実際の教壇には立てないのである。経験豊富な教員であれば、そういった部分は、わざわざ書く必要もなければ教授項目を見れば、「リピートしてください」とか「では、練習しましょう」などの教室用語も自然に出て、授業は円滑に流れていく。さらに個々の教員の個性も加わって、参考教案の導入例だけでなく、さらに工夫した導入で、学習者を飽きさせない楽しい授業を作り出せるのかとも思う。言い換えれば、料理人のような職人の世界の話であり、参考教案は標準的なレシピのようなものでもある。



青年会・婦人会海外人材派遣生の模擬授業の様子

教員の熟達化

授業準備の助けにもなり、新人教師の育成にも活用している参考教案であるが、課題もある。筆者は熟達化が教員養成においても重要であると考えているが、勤務する学校での熟達化過程を次のように考えている。

初級者：３年位までで教科書の全ての項目を一通り経験
中級者：海外勤務も含めて５～７年目で、主体的に判断ができる
上級者：８年以上の経験があり、初級から上級まで幅広く対応でき、担任としてクラスを運営できる
熟達者：10年以上の経験と教育に関する幅広い知識と知識を創造する知恵を備えた者

一般的に初級者はマニュアルにある情報を模倣したり、先輩の指示どおりに従って課題を遂行する。つまりマニュアル化された教授項目を授業の中で一通り行うことができるレベルと言える。問題はこの初級者の段階で「初級者の幸福」（一通りのことができるようになり、それだけで十分幸福を感じること）を味わい、成長が止まってしまうことである。マニュアル化された参考教案の落とし穴とも言える。初級者から段階を追って熟達化していくことが望ましいが、そのためには次に述べる徒弟制が重要である。徒弟制とは親方や師匠が弟子に手伝わせながら様々な技能を習得していくことであるが、日本語教師の養成においてもこれは重要である。なぜなら学習の場である実践の場で一定の役割を果たしつつ、新人が部分的な仕事に携わりながら全体の仕事の流れを学んでいくことで、大きな学習効果をあげることができるからである。また仮に初級者が失敗をしたとしても、それが決定的な失敗にならないように指導者はコントロールすることができる。

［参考文献］
波多野誼余夫・永野重史・大浦容子『教授・学習過程論―学習の総合科学を目指して―』第６章「熟達化」放送大学大学院教材、2004年、69～78頁。

宗教伝統における聖典の意味構造（7）

「語られる聖典」としての儒学テクスト

天理大学名誉教授
おやさと研究所嘱託研究員
澤井　義次　*Yoshitsugu Sawai*

近代日本の学知の基盤には、近世儒学の伝統があったと言われる。その伝統は明治期に入ると、近代学校の設立に伴い次第に衰退した。ところが、その伝統を宗教学的に捉えなおすと、儒学テクストが「語られる聖典」の特徴をもっていたことは注目すべき点であろう。こうした視点から、その伝統における漢籍の「読書」の宗教的な意味を再考してみたい。

儒学テクストの「読書」

近世儒学の伝統では、子どもたちは四書五経などの「経書」を繰り返し声に出して読んで、その内容を自然に覚えた。手習塾、いわゆる「寺子屋」における学習と教育は、師と弟子のあいだの、信頼と尊敬にもとづく一対一の人格的で個人的な師弟関係であった。江戸時代の有名な儒者の貝原益軒は、師が弟子にとって模範でなければならないこと、さらに師に対する弟子の信頼と尊敬が不可欠であることを強調している。[1]

手習塾における「読書」とは、声に出して暗誦することを意味した。それはいわゆる「素読」であった。弟子たちは素読をとおしてテクストを記憶した。テクストの言葉の理解だけでは、表層的な意味理解にすぎなかった。ところが、心や眼や口など、身体の多くの器官をとおして読むことで、儒学テクストの素読を終えると、独力で自在に漢籍を読み解くだけの学力を習得できた。儒学テクストの素読によって〈身体化〉された「儒学の知」は、日々の生活の場で実感をもって、テクストの意味が次第に深く理解され、それが日々の生き方の中に具体化されていった。こうしたプロセスを経て理解された儒学テクストは「書かれた聖典」でありながら、それが同時に「読書」をとおして「語られる聖典」にもなった。

記憶による儒学テクストの知の理解

こうした脈絡において、「語られる聖典」の視座から「素読」の宗教的意義を捉えかえすと、その知の修得には、イスラームにおけるクルアーンの朗誦やヒンドゥー教のウパニシャッド聖典の暗誦などと類似した根源的パターンがあることに気づく。漢籍の素読は、教育史学者の辻本雅史も言うように「身体的読書」であった。それは今日、私たちがイメージする読書のような黙読ではない。本は黙読していると、本を前後に行き来して読むことができるし、言葉の意味を確認しながら読み進めることもできる。そのことによって、本の内容を論理的に理解することができる。しかし、素読は音読である。それは息の出し入れ（呼吸）、声の響きや抑揚、リズムなどを伴う身体的な言語活動である。辻本が強調するように、古典テクストは素読によって「日常の言葉とは異なった次元で、独特の漢語の言語形式がまるごと幼い身体に刻印・体得される」。思考が言語活動であることを考えると、「素読で身についた漢語の形式がいわば『精神の言葉』となり、思考の様式を形づくる」ことになった。[2]

江戸時代には、四書五経や史記・漢書をはじめ、多くの漢籍が学者文人たちによって訓点・注釈を加えられ翻刻された。弟子は師から訓読法の要領を教えてもらうと、後は一人で多くの漢籍を読むことができた。子どもの頃、師が訓読するのに倣って儒学テクストを記憶しておくと、素読によって修得した儒学テクストの知の理解は生涯、徐々に深化していく。素読すなわち訓読によって読む文章の内容は、ある程度まで理解できたとしても、子どもには漢籍の内容があまり理解できず、師が読んで聞かせる文章をただ繰り返すだけにすぎない。しかし、素読によって子どもの心に滲み込んだ多くの漢籍の文章や句は、成長するにつれて、その意味が徐々に理解できるようになる。

中国哲学者の竹内照夫は、著書『四書五経』の中で、素読が「解釈にわたらないから読書進度が早く、学習期間は短かくても多くの書物をあげることができる」と言う。ところが、素読すなわち訓読は「一種の速成直訳法であり、かつ極めて定式的である」ので、「訓読は翻訳の予備段階にとどまり、原作の周到正確な、日本語への書き換えということができず、大づかみの内容理解にとどまる」とも言う。素読によって読む文章の内容は、ある程度まで分かるが、その程度は読む人の知識教養の程度に対応していた。[3] 江戸時代に普及した訓読による漢籍の「読書」は、四書五経の素読を基本としていた。そのことが当時の読書人口の増加を促し、さらには後に専門的な研究者を輩出することにつながっていった。

漢籍の「読書」と知識人

江戸時代の知識人は漢文で考えたという。人びとは素読によって学問の言語能力を獲得し、漢文のなかでも、儒学の概念を知的メディアとして思想を形成した。近世の学知はおもに漢文と儒学思想に規定されていた。素読は漢文という知的言語を修得するプロセスであった。漢文による儒学の知は漢籍の素読をとおして、人びとの身体に滲み込んで、心の深みへ次第に深化していった。「書かれた聖典」としての儒学テクストが、素読をとおして、まさに「語られる聖典」となっていったのだ。素読によって記憶された儒学テクストは、最初はその内容が理解できなかったとしても、次第にテクストが理解できるようになった。そうした点に、儒学テクストの「読書」のおもな特徴があった。明治期になって近代学校が普及し、儒学を学ぶ伝統がなくなると、儒学は価値のない過去の学問とみなされ、儒学テクストの身体的な「読書」の伝統は自ずと衰退していった。

明治期から大正期に勉学時代をすごした知識人たちは、身体的な「読書」への郷愁を共有していたと言われる。国文学者で文芸評論家の前田愛も指摘するように、「音読から黙読へ」という流れのなかに、「近代読者の成立」を位置づけることもできるだろう。[4] たとえば、哲学者の西田幾多郎（1870～1945）もそうした一人であった。西田はエッセイ「読書」（1938年）のなかで、小さかった頃、「昔祖父が読んだという四箱か五箱ばかりの漢文の書物を見るのが好であった」と記している。西田のこの言葉は、儒学伝統の名残りを彷彿とさせる。またイスラーム学・東洋哲学で知られる井筒俊彦（1914～1993）は、子どもの頃、父親から漢籍の素読を強いられたという。彼は坐禅とともに『臨済録』、『碧巌録』、『無門関』などの禅籍も読んだ。井筒が遺した蔵書には、数多くの漢籍も含まれるが、彼は幼少期から生涯にわたり漢籍にも親しんだ。そうした漢籍の「読書」は、井筒独自の「東洋哲学」構想にとって重要な契機の一つになった。このことは井筒哲学を理解するうえで極めて興味深い。

［註］

1．貝原益軒（松田道雄訳）「和俗童子訓」（『貝原益軒』日本の名著14、中央公論社、1969年）、195頁、200頁。辻本雅史『「学び」の復権』角川書店、1999年、142～145頁。
2．辻本雅史『教育の社会史』（放送大学教育振興会、2008年）、83頁。
3．竹内照夫『四書五経―中国思想の形成と展開―』平凡社、1965年、238～240頁。
4．前田愛「音読から黙読へ」『近代読者の成立』（前田愛著作集・第2巻）、筑摩書房、1989年、122～150頁。

イスラームの聖地巡礼―コロナ禍のマッカ―

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

コロナ禍での宗教活動

2020年以来、猛威をふるっている新型コロナウイルスは、経済活動だけではなく、宗教活動にも大きな影響を与えている。天理教においても、月次祭への参拝自粛、各種行事の中止や変更を余儀なくされてきた。移動の制限が要請されることで、「おぢばがえり」(天理教の聖地ぢばへの巡礼) を行うことが難しい。

天理教のおぢばがえり

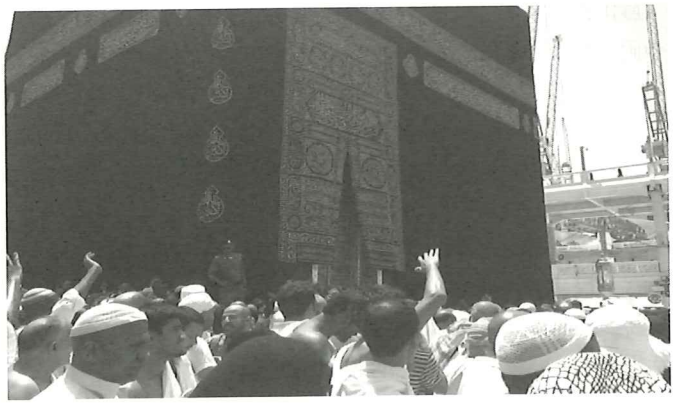
特に、こどもおぢばがえりは、毎年夏に20万人以上の参加者がある一大イベントである。ぢばは親神天理王命が人間を初めて宿し込み、創造した地点であり、天理教にとっては信仰の中心地点であり故郷(ふるさと)である（こうした理由から、「おぢばがえり」と呼ばれている)。そのため、ぢばで過ごす時間は、子どもたちへの信仰継承の場であると同時に、ぢばへの思慕の想いを強くさせるという意味合いをもつ。近年では、空路や陸路が整備されている。それでもなお、海外在住の天理教信者にとっては、現在でも、ぢばへ帰る機会は一生に一度しかないということもある。

イスラームのマッカ巡礼

日本語でも、「高校ラグビーのメッカ、花園」のように、聖地を「メッカ」という言葉で呼び表すことがある。日本で「メッカ」(Mecca) という表現が広まったのは、アラビア語の「マッカ」(Makkah) が欧米で「メッカ」と訛音し、そのまま日本に伝わったからだと考えられる。

イスラームにおける三大聖地とは、マッカ（メッカ)、マディーナ（メディナ)、そしてアル＝クドゥス（エルサレムのアラビア語表記) である。マッカは、公式には「栄光なるマッカ」(Makkah al-mukarramah) と呼ばれており、イスラーム最大の聖地である。

イスラームにおいて、1日に行う5回の礼拝は、このマッカにあるカーバ神殿に向けて行われる。カーバ神殿の位置するマッカへ巡礼することは、信仰における五行（信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼）として教えられ、信仰上は義務の一つである。ただし、巡礼は経済的にも体力的にも困難である場合は、巡礼を行う必要はないとされている。この点については、喜捨（ザカート）についても同様で、日々の糧を得るので精いっぱいの貧者は喜捨の必要はないとされている。このことから、マッカ巡礼は努力義務に近いとも言えよう。



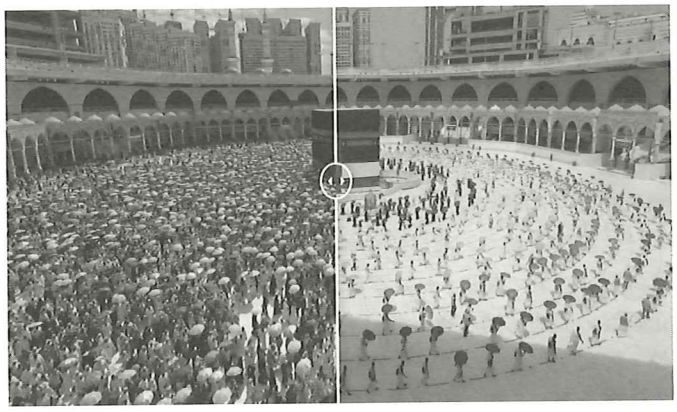
マッカ巡礼でカーバ神殿に手を伸ばす人々（2014年）
Cangüzel Güner Zülfikar 氏（トルコ・ウスキュダル大学）提供

マッカ巡礼とは

マッカ巡礼は、イスラーム暦の第12月「巡礼月」（ズー・アル＝ヒッジャ月）の8日から10日にかけて、マッカのカーバ神殿とその周辺を中心に行われる。「カーバ」とは「立方体」を意味する。純粋な太陰暦で運行されるイスラームのマッカ巡礼に関して、マッカ巡礼は、2020年は7月28日の日没後から始まり、2021年は7月21日の日没後から始まる予定である。

コロナ以前は、このマッカ巡礼には毎年200万人以上の巡礼者が訪れていた。受入れる側として、マッカがあるサウジアラビア政府は受入れ人数を制限している。巡礼者が一気に押し寄せても、受け入れるだけの宿泊施設を確保できないからである。そのため、サウジアラビア政府は毎年巡礼用の特別ビザを、各国の大使館を通じて発行している。今や、マッカ巡礼は時間と旅費が確保できても、容易には行くことができない状況にある。

ただし、マッカという聖地は1年を通して訪れることが可能である。巡礼月以外に訪れることを「ウムラ」と呼ぶ。巡礼月に訪れるマッカ巡礼を「大巡礼」と呼び、それ以外の巡礼を「小巡礼」と呼んで区別している。



コロナ禍以前のマッカ巡礼（左）と2020年のマッカ巡礼（右）
記事上では中央のバーで、スライド可能となっている
（2021年7月29日版　CNNのニュースサイトより）

コロナ禍での聖地巡礼

CNNの記事によると、2020年のコロナ禍で行われたマッカ巡礼は、総数が約1,000人に限定されたそうである。筆者のイメージでは、マッカ巡礼のイメージと言えば雑踏のなかで、人々がカーバ神殿の周囲を旋廻したり、カーバ神殿に触れようと手を伸ばしている光景であった。

しかし、2020年は海外からのマッカ巡礼を禁止したうえで、サウジアラビア在住の外国人ムスリムを選抜して行われたようである。マスクを着用し、ソーシャルディスタンスを確保して行われた2020年のマッカ巡礼は、衛生管理の最も厳しいものであったと推測される。さて、ワクチン接種も進められているが、2021年のマッカ巡礼はどう行われるだろうか。

[参考URL]
「200万人から1,000人へ―ソーシャル・ディスタンスのマッカ巡礼が示す印象的な写真―」(https://edition.cnn.com/2020/07/29/middleeast/hajj-coronavirus-social-distancing-intl/index.html　2021年6月7日アクセス)

遺跡からのメッセージ（71）

大和の文化遺産を学ぶ⑨

―天理参考館の収蔵資料を活用した唐古・鍵遺跡の再評価

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

令和２年(2020年)10月24日～12月６日、田原本町の唐古・鍵考古学ミュージアムでは、コロナ禍のために延期されていた企画展「よみがえる弥生の祭場－唐古・鍵遺跡と清水風（しみずかぜ）遺跡－」が満を持して開催された。清水風遺跡や県内の各遺跡から出土した絵画土器等が一堂に集まったのは壮観で、弥生人が土器の器面に描いた数々の線刻画に目を奪われた。それとは別に注目されたのが、第Ⅱ部「唐古・鍵遺跡採集品里帰り展―飯田氏と森本六爾の所蔵資料―」として、天理大学附属天理参考館が所蔵する土器や石器などの資料が展示されていたことだった。

天理参考館が常設展示をしている唐古・鍵遺跡の絵画土器片は、私も授業等で活用をしている見慣れた資料だが、それ以外の土器片や石器類ははじめて目にするものだった。これらの資料は、遺跡近くにお住まいだった飯田松次郎・恒男親子が明治年間から昭和初期にかけて拾い集めていたものが、戦後になり、参考館の収蔵資料となったらしい。飯田親子が昭和４年（1929年）に刊行した『大和唐古石器時代遺物図集』には、採集遺物の一部が紹介されているが、天理参考館の資料にはその図集に掲載された写真と照合できるものがあるようだ。企画展の開催に携わった藤田三郎氏（田原本町文化財保存課主幹・埋蔵文化財センター長）に事情を尋ねると、資料借り出しの作業をとおして、天理大学附属天理参考館には、飯田親子が唐古・鍵遺跡で採集した石鏃など約１,000点の資料が収蔵されていることがわかったとの話であった。とくに重要な飯蛸壺（いいだこつぼ）は、唐古・鍵遺跡の交易圏の広さを示しているという。藤田氏によれば、これらの資料は唐古・鍵遺跡の奥深さを示す重要なもので、今後、全容の把握と詳細な調査研究を行い、その成果を公開・活用することが望まれるとのことであった。

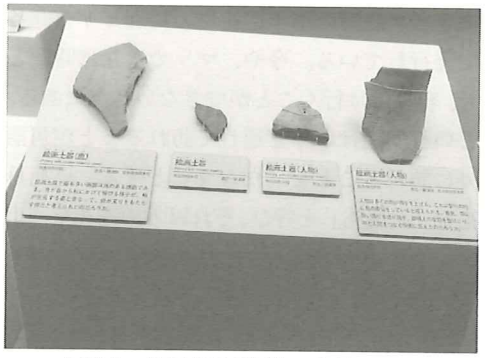


写真１　飯田親子が採集した絵画土器（天理参考館）

折しも、令和２年（2020年）８月、天理大学と田原本町は、健康で活力ある社会の実現をめざすことを目的として、「包括的連携に関する協定書」を締結したところであった。協定書では、連携協力事項として、健康づくりに係る活動のほか、「地域コミュニティー活性化に関すること」「学術研究に関すること」などが含まれ、唐古・鍵遺跡の調査研究や保存・活用などの分野においても、天理大学が保有する知的・人的資源を活用してゆく方向性が示されていた。そこで、この協定を踏まえて、関係者が協議をおこない、「天理大学附属天理参考館収蔵資料を活用した唐古・鍵遺跡の歴史的・社会的価値の再評価」と題した共同研究を企画することとなった。共同研究には、田原本町の職員、天理大学の教員、天理大学附属天理参考館の学芸員、その他関係者がメンバーとして参加し、天理参考館収蔵の「飯田コレクション」について、それぞれの役割分担に応じて調査研究を行いながら、資料の全体像を把握し、目録を作成する作業を進めてゆく方針となった。

天理大学・天理参考館・田原本町の三者によるこの共同研究は、幸いにも、県内の関係機関等と共通で設定した課題の解決を目的とした研究として、天理大学学術・研究・教育活動助成（地域課題研究助成）に採択され、令和３年（2021年）４月、研究活動が開始された。第１回打ち合わせ会（４月23日）では、天理参考館学芸員の藤原郁代氏が「飯田コレクション」の概要を説明し、第１回研究会（６月３日）では、藤田氏が、「唐古・鍵遺跡における飯田コレクションの意義」と題した報告をおこなった。

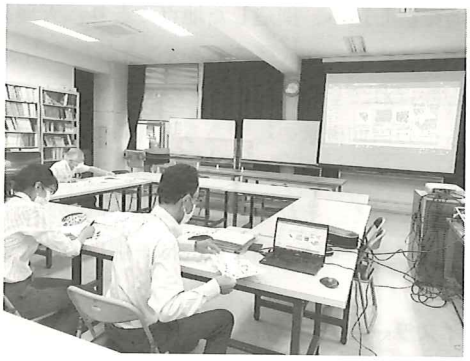


写真２　オンラインを併用した第１回研究会の会場風景

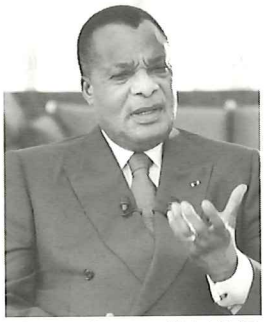
藤田氏の報告によると、明治34年（1901年）、唐古・鍵遺跡を初めて学界に紹介したのは高橋健自氏（当時は畝傍中学校教員）だったが、その高橋氏に遺物の存在を教えたのが飯田隆蔵氏だった。大正６年（1917年）、鳥居龍蔵氏による現地調査を大阪毎日新聞が大きく報じたことを契機に、森本六爾、梅原末治などの考古学者が次々に飯田氏のもとを訪れた。大正12年（1923年）３月、大和史学会が高田高等女学校で開催した上代遺物展覧会では、森本六爾氏のコーディネートで飯田氏の採集遺物が出品され、同年から翌大正13年（1924年）にかけて、梅原末治、森本六爾の両名が競うように飯田氏の採集資料を学会誌に紹介したことで、唐古遺跡（唐古・鍵遺跡の旧称）の重要性が広く全国的に知られてゆく。飯田氏の採集資料に絵画土器や銅鏃１点が含まれていたことが、近畿地方の弥生時代に対する認識を改めたのだ。昭和４年（1929年）の『大和唐古石器時代遺物図集』では、弥生土器57点、打製石器29点、磨製石器15点　石製品12点　土製品２点　金属器１点など、合計137点の採集遺物が網羅的に記載されたほか、遺物の散布範囲が唐古池を中心に東西440m、南北650mに及ぶとして、遺跡の広がりに対する認識が示されていることが興味深い。

藤田氏によるこれまでの検討により、大正年間に梅原・森本の両名が報告した土器の実物が天理参考館の「飯田コレクション」に含まれていることが判明している。共同研究では、今後、「飯田コレクション」の目録作成に取りかかり、『図集』に記載された遺物との正確な照合を行う必要がある。多年にわたって遺物を採集した飯田親子の活動が、唐古・鍵遺跡のみならず、弥生時代の研究に大きな役割を果たしたことは、当地における近代の歴史の一コマとしても重要だ。平成29年（2017年）、遺跡の現地は史跡公園に生まれ変わり、市民の憩いの場として活用されている。今回の共同研究が、唐古・鍵遺跡の「弥生力」を地域文化として活かすという史跡公園の活用基本方針に寄与するものになることをめざしたい。

ドゥニ・サス＝ンゲソ大統領①

国際学部教授
おやさと研究所兼任研究員
森　洋明　*Yomei Mori*

2021年3月21日、コンゴで大統領選挙が行われた。現職のドゥニ・サス＝ンゲソ大統領（Denis Sassou-Nguesso）が4選を目指した選挙戦では7人の候補があった。そのなかで現大統領の対抗馬として最も有力視されていたコレラ氏（Guy-Brice Parfait Kolélas）が選挙中にコロナに感染したことが分かり、体調を崩しパリへ搬送されることになった。もともと選挙前から現大統領の圧勝が予想されていた選挙ではあったが、実際に88.57%の得票率で4選を果たした。アフリカにはカメルーンのビア大統領や赤道ギニアのンゲマ大統領やウガンダのムセベニ大統領など、長期にわたって政権に就く国が少なくないが、サス＝ンゲソ大統領も、これまでの36年間の政権を含めると、これで40年を超えて政権の座に就くことになった。


ドゥニ・サス＝ンゲソ大統領

サス＝ンゲソ氏が最初に政権を担ったのは1979年のことである。コンゴ労働党単一政党の時代である。社会主義路線を進めたマリアン・ングアビ大統領が暗殺され、その直後に結成された党軍事委員会の主要メンバーとして政権の中枢に身を置くこととなった（2020年3月号）。大統領には同胞のヨンビ＝オパンゴ氏が選出されたが、国の混乱をもたらしたことによって糾弾され、サス＝ンゲソ氏が大統領に就いた。

大統領就任まで

サス＝ンゲソ氏は1943年、コンゴ北部のオヨ（Oyo）の近郊の村で生まれた。小学校時代はオワンド（Owanndo）で過ごすが、56年から60年には南のドリジー（Dolisie）で中学時代を過ごした。当時の彼は学校の先生を目指していたようだ。ところが、1961年には中央アフリカで軍人になるための訓練を受け、翌年にコンゴに帰った彼は、少尉（sous-lieutenant）となって軍でのキャリアを始めることになる。63年には中尉（lieutenant）となり、落下傘部隊に配属される。それは、65年にングアビ大統領が組織したコンゴ空軍の最初の落下傘部隊だった。68年から75年にかけて大尉（capitain）、少佐（commandant）そして大佐（colonel）と順調に軍で昇級していった。

政治面では、1960年代の半ば、ングアビ氏が率いる急進将校（la mouvance des officiers progressistes）の動きに賛同し、1969年12月31日、マルクス・レーニン主義を唱えるコンゴ労働党（Parti congolais du travail）の設立メンバーの一人になった。彼はここから政界へと進出していく。とくに1977年、ングアビ大統領の暗殺後に国の政権を握った党軍事委員会（Comité militaire du Parti ）は、憲法の一時停止を宣言し、ヨンビ＝オパンゴ氏を大統領に推挙した。そしてサス＝ンゲソ氏は第一副大統領と党との連携を担う重要なポストに就いた。同時に、国防省のトップとなったのである。

ヨンビ＝オパンゴ大統領就任から1年後の1978年、この両者の対立が表面化する。党を掌握するサス＝ンゲソ氏が有利な立場にあり、ヨンビ＝オパンゴ大統領は党内において少数派となり、1979年2月には党軍事委員会によって、委員長の辞任に追い込まれた。それは同時に彼がコンゴの大統領の座からも下りることを意味した。そしてその後にサス＝ンゲソ氏が暫定的に委員長に就任して党大会を招集、3月にはコンゴ労働党のトップに選任され、同時に国の大統領に就任したのである。独立以来5代目の大統領の誕生である。任期は5年だった。

大統領就任以降

彼が政権を担った当初、国の経済は危機的な状況であった。それはすでにマサンバ＝デバ大統領時代から続いていたことで、社会主義路線に変わっても経済は好転には向かわなかった。ところが翌年の1980年、経済の中心地であるポワント・ノワール沖で海底油田が発見されたことにより、状況が一転した。独立以来、なかなか手が付けられてこなかった道路や橋、交通手段など都市インフラが整備されていく。さらにまた新たな油田が発見されたことによって、国の歳入は増加し経済は活性化、学生への奨学金制度も生まれた。当時、石油の価格が世界的に高騰していたことも幸いし、1960年の独立以来、国は最も経済的に潤った時代を迎えることになった。

ところがである。石油の世界的な価格の下落が起こった。1985～86年には石油価格は60%以上も下落したのである。石油に依存していた国家収入は大打撃を受け、将来的な石油収入を担保にし対外借款が少しずつ膨れ上がっていった。

1984年、コンゴ労働党はサス＝ンゲソ大統領の再任を決定し、彼は新たに5年間政権を担うことになる。対外的な負債を軽減するために、独占的な国の経済を緩和し、社会主義路線から少しずつフランスなど西側諸国に近づくように切り替えていく。ただ、国内では公職の汚職が蔓延し、経済危機で奨学金が停まってしまったことで学生の反対運動など、すこしずつ政権に対する批判が高まっていく時代でもあった。1986年には街の映画館や空港でテロ騒動などが起きた。その一方で、サス＝ンゲソ大統領はアフリカ統一連合（l' Organisation de l'unité africaine）の議長として選出され、当時アパルトヘイト下にあった南アフリカのネルソン・マンデラ氏の釈放に向けて奔走し、国際舞台でも頭角を表していった。

1989年7月、彼はさらに党の総会で選出され、さらに5年間の政権が約束された。だが、世界的な動きのなかで、彼はその任期を全うしないで政権の座から降りることになる。それはベルリンの壁の崩壊から始まる共産主義国家の消滅と連動した動きで、単一政党制から複数政党制への大転換であった。

2021年の大統領選挙は、90年代に複数政党制が導入されてから4回目となる。大統領選挙が行われるたびに内戦に陥るような国が多いなかで、平和裏に選挙が行われたことは評価できる。ただ、複数政党制が確立されたとはいえ、長期にわたって同じ政権が続いていることも事実である。コロナの病床からコレラ氏は、酸素吸入器を外して「国民よ、変化のためにみんな投票してくれ。私も戦う。みんなも戦ってほしい」と呼びかけた。だが、結果が分かっている選挙はそれほど盛り上がらなかったのかもしれない。彼が息を引き取ったのは、大統領選挙の投票箱が閉じられた数時間後だった。

ケア・フェミニズムの提唱

おやさと研究所
天理ジェンダー・女性学研究室
金子　珠理　*Juri Kaneko*

コロナ禍とケア労働

昨年以来の新型コロナウィルス禍を通して、私たちの生活の根幹を支えているケア労働の重要性が、図らずも明らかにされることとなった。現場から離れることのできない対人ケア関係の医療機関・介護施設および保育・教育機関、そしてインフラを支える食料、電気、ガス、水道、通信、交通などの供給にかかわるエッセンシャルワークは、本来、リモートワークとは無縁であり、リスクを負いながらも、ワーカーの高い倫理性によって遂行されている。

さらに家庭内においては、休校中の児童や在宅勤務者（夫など）にかかわる、家事や健康管理といったケア労働（主として「主婦」が担う）の増大もみられた。家庭に丸投げすればなんとかなると言わんばかりに、家庭が、そして女性が“活用”された。

ケア・フェミニズムの潮流

ところでコロナ禍以前より、2010年代以降のフェミニズム研究においては、ケアや依存に着目し、既存の社会のあり方を再検討しようとする「ケア・フェミニズム」の議論が活発になされている。言うまでもなく、そのルーツは、1980年代アメリカのキャロル・ギリガンによる「ケアの倫理」の提唱に遡る。その後、フェミニスト倫理学者のエヴァ・キテイが、『愛の労働』（1999＝2010）において、ケアを「依存労働」と捉え、依存する存在としての人間観に基づく社会制度のあり方について探求するなど、議論が続いている。

前回、確認したように、「主婦バックラッシュ」による男女共同参画批判の主張の内実は、主婦によってなされているケアの承認を求めるものであった。それは、現にケアを担っている者から自らの「依存労働」（キテイ）の意義を訴えるものではないかと、鈴木彩加は指摘している。したがって、「主婦バックラッシュ」は、性別役割分業を肯定する点で異なるとはいえ、「ケア・フェミニズム」との接点も多いと、鈴木は述べている。

リーン・イン・フェミニズムへの対抗

一方、20世紀の終わり頃から、競争や効率を重んじる新自由主義が世界を覆い尽くすようになった。そうした体制の「内側に入る」「一員となる」（leaning-in）フェミニズム、すなわち「リーン・イン・フェミニズム」への対抗という文脈においても、「ケア・フェミニズム」が注目されている。

『99％のためのフェミニズム宣言』の著者たち（シンジア・アルッザ、ティティ・バタチャーリャ、ナンシー・フレイザー）および菊地夏野の解説によれば、「リーン・イン・フェミニズム」の代表とされているのが、リベラル・フェミニズムである。「リーン・イン・フェミニズム」は、女性も競争に参入し、そこで高い生産性を挙げ、マーケットや国家に貢献することをフェミニズムの目的とする。新自由主義の掲げる「競争」や「効率」の言葉には人々は抵抗する一方、「多様性」という言葉で女性の成功や活躍が語られるとき、途端に新自由主義は輝きを増すというわけである。このようにして新自由主義が正当化され、フェミニズムはその侍女になり果てたと、N・フレイザーはいう。また、新自由主義の市場中心の平等観は、差別を糾弾し「多様性」を掲げているとはいえ、その正体は能力主義（メリトクラシー）であるとされる。したがって能力のある女性は歓迎されるものの、99％の女性が直面している、社会経済的な差別の解消には取り組もうとしないのが、その特徴であるという。

日本の行政によるフェミニズムも、従来リベラル・フェミニズムであった。男女共同参画政策はもとより、近年の女性活躍政策の下にあっても、女性たちは従来の家事労働に加えて、「賃労働」（多くは非正規）、さらには「産む」（再生産労働）という二重の「生産性」を期待される存在となっている。実はそこには、経済成長、少子化対策、福祉削減の意図が秘められている。しかし、今日のポストフェミニズム状況下において、すでに若い女性たちは、キャリアと産むことについての自己マネジメントを行い、結果についての自己責任を内面化していると、元橋利恵は指摘している。

社会的再生産の視座

「99％のためのフェミニズムとは、「社会的再生産」（social reproduction）に根差したフェミニズムであるとされる。以下、菊地夏野の解説に依拠し、社会的再生産と資本主義とジェンダーの関係について辿ってみよう。

社会的再生産とは、「生命を産み、維持し、継続させる活動と制度」を意味しているという（T・バタチャーリャ）。具体的には、出産、育児、家事、介護といった活動、そして住居、公共交通、病院、学校などの制度であり、主として担っているのは女性である。この社会的再生産から経済的再生産をくり抜き、分離し序列化することで資本主義が成立したと、フレイザーは述べる。資本主義は、社会的再生産を価値の低いものとして扱うが、このことが女性の抑圧の根本にあるとされる。逆に言えば、資本主義は、ジェンダー化された社会的再生産の抑圧なしには成立し得ないことになる。

こうしてみると、「99％のためのフェミニズム」は、ケア・フェミニズムと親和的であることが分かる。さらには、エコフェミニズムにおける、資本主義の論理に対抗するオルタナティヴな社会の構成原理としての「サブシステンス」概念（あらゆる人間的活動の根底にある営み）や、資本主義への批判的立ち位置などと考え合わせれば、それはエコフェミニズムとも近い距離にあるといえる。

翻って、宗教の方向性を考えるとき、「勝ち組」への仲間入りを目指す、体制的で現世利益的な、いわば「リーン・イン宗教」ではなく、ケアに重きを置く宗教が人々に選ばれることは、論を俟たないであろう。

［参考文献］
エヴァ・フェダー・キテイ『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社、2010年。
鈴木彩加『女性たちの保守運動』人文書院、2019年。
シンジア・アルッザ、ティティ・バタチャーリャ、ナンシー・フレイザー共著『99％のためのフェミニズム宣言』（惠愛由訳、解説：菊地夏野）人文書院、2020年。
元橋利恵『母性の抑圧と抵抗』晃洋書房、2021年。

図書紹介（123）

澤井　真著

『イスラームのアダム』（慶應義塾大学出版会、2020年）

おやさと研究所主任
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

著者の澤井真氏は、本誌での連載のように、専門領域をイスラーム神秘主義思想としています。本書は、2部構成になっています。第1部ではアダム神話（アダムが焦点）に焦点をあて、第2部でイスラームにおけるアダムという「人間」についての考察から、アダムという存在を「完全人間」という視座から論を展開しています。ここでは、序で丁寧に述べられた本書へ思いについて紹介しておきたいと思います。

序の冒頭で、「本書は、アダムという存在をめぐる政治的・思想的解釈に注目しながら、イスラーム神秘主義思想の形成をたどることで、宗教学におけるイスラーム研究を批判的に考察しようとするものである」と述べられています。さらに「本書が扱おうとする課題は、近代の宗教言説の展開を射程に入れつつ、イスラーム神秘主義思想がアダムという存在をめぐって、いかに新しい思想を紡いできたかを明らかにすることである」とも記され、イスラームにおけるアダムがイスラーム神秘主義思想の進展や展開の核になってきたということが窺われます。

ところで、序には「宗教研究とイスラーム神秘主義」という題目がついています。この題目が示す視点は、「『イスラーム神秘主義』を一つの場として、人間をめぐる知が創り出されていく仕方を考察すること」を示すもので、以下のように続きます。

> イスラーム思想史において、神秘主義的側面とみなされる「タサウウフ」（taṣawwuf）やその担い手であるスーフィー（Ṣūfī）は、九世紀半ばに民衆的運動として始まった。オスマン朝の為政者によって重用されたこともあるが、事あるごとに、神秘主義は、法学者たちによって批判され異端視されるなど、マージナルな位置に追いやられてきた。こうした状況に対して、スーフィーたちは法学者が担う知（‘ilm）を外面的は知とみなす一方で、神秘主義が担う神秘知（ma-‘rifah）を内面的な知であることを主張する。

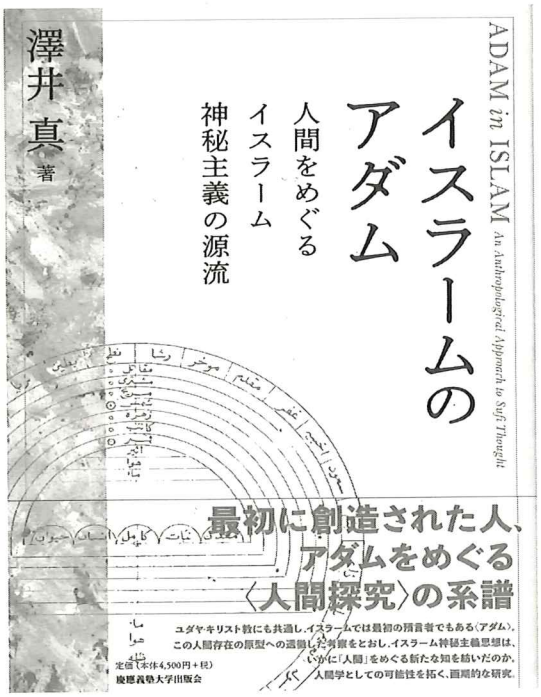
しかしながら、この知的・社会的にマージナルであったスーフィーたちこそが、「知に新しい息吹を与える存在」であり、「アダムへの考察を通して、新しい知をイスラームに埋め込んだ」といいます。

序は、

1　宗教学はいかにイスラームを理解してきたか
2　宗教学はイスラームをいかに理解すべきか
3　スーフィズムからイスラーム神秘主義へ―人間性の探究
4　イスラーム神秘主義における人間探究と「体験主義」
5　アダムからみた人間

と話題が流れるように展開され、本論の理解を適切にたすけています。イスラームについて宗教学が理解してきたであろうこと、イスラームとは一体何を指してきたのかということ、そして、スーフィズムのイスラームにおける立ち位置や意義、さらに「アダムという存在」が神と人間とを理解するための必然であることを手際よく解説しています。

アダムはイスラームにとっても神によって創られた人間の祖であり、人間の存在の理解は、アダムに付与された特性を通して行われたことに加え、「アダムは神から直接語りかけられたという『体験』をもち、人間存在の行く末を決定づける場に



居合わせた」ことが指摘されます。この体験への注目が、スーフィーをして、掘り下げたアダム理解が人間理解に直結すると考えさせてくれます。アダム解釈による新たなイスラーム人間論は、信仰者や共同体を新しく意味づけるようになりました。著者は、序の最後で次のように宣言します。

> 神秘主義者が人間理解を通して目指すのは、神秘的合一によって神を真に知ると同時に、隠された神秘知を体現した完全な人間存在になることである。このとき、神という把握不可能な超越的存在を知ろうとする彼らの前に投げられた手がかりこそが、人間の源流にあるアダムなのである。

イスラームにおける神秘主義的人間学を、アダムをめぐる人間解釈を通して明らかにしようとしたこの試みが、どのように展開されているか知るために、是非、本書の一読をお勧めします。

本書の構成は以下の通りです。

序　宗教研究とイスラーム神秘主義
第1部　クルアーンの内的意味を求めて―アダム神話とその解釈学的想像力
第1章　解釈学的想像力の場としてのアダム
第2章　アダム神話の追体験―「原初の契約」に蹴る始源への帰還
第3章　イスラームの死生観と人間
第4章　名を与えられたアダム―生と死のはざまで
第2部　アダムにならいて―イスラーム神秘主義哲学における人間
第5章　イブン・アラビー学派における存在論的流出論の展開
第6章　霊的権威（リーフ）としての完全人間
第7章　絶対存在から人間へ―神名の体現者としてのアダム
第8章　完全人間論の展開―アダムをめぐる神秘主義的人間学
結
あとがき／主要参考文献／注／人名・著作名索引

第339回研究報告会（5月27日）
モンゴル・シャーマニズムと身心変容

アルタン・ジョラー（おやさと研究所受託研究員）

天（テングリ）を最高の崇拝対象とするモンゴル人のシャーマニズム信仰は、外来宗教と政治政策の影響を受けながら今日も生き残っている。今回の発表では、発表者のフィールド・ワークに基づき、ホルチン地方におけるモンゴル・シャーマン＝ブォの儀礼的実践について紹介した。

ホルチン地方のブォの儀礼は主に供犠儀礼（シュースレホ）、憑依儀礼（ホブシラホ）、悪霊払い（グリム・ガルガホ）や難関儀礼（ダバー・ダバホ）などがある。これらの儀礼の過程で、ブォが自分自身や参加者に顕著な身心変容を引き起こしている。そして、通常と異なる身心状態が、ブォの霊的知識と力の獲得やその伝承と直接結びついて考えられているということが窺える。

アルタン・ジョラー氏は中国・内モンゴル自治区出身の文化人類学者。内モンゴル師範大学で修士号取得後、日本に留学。千葉大学大学院、京都大学大学院博士課程を修了。現在、上智大学グリーフケア研究所に勤務しながら、4月からはおやさと研究所受託研究員を勤めている。

マイグレーション研究会で研究発表

尾上　貴行

5月8日、マイグレーション研究会の5月例会が、オンライン形式（Zoom）で開かれ、報告者の一人として、尾上が「戦時日系人収容施設における『住』」と題して報告した。

本報告では、太平洋戦争時、アメリカ合衆国連邦政府によってアメリカ各地に設置された日系アメリカ人収容施設での「住」に注目し、政府当局の方針、収容施設における住居と施設、日系人たちの住環境への対応などについての考察を試みた。

政府当局の視点からは、施設の画一性と多様性といった特徴と、物質不足や労働者不足による住居建築の遅延、継続的な住居の修繕・労働力確保といった課題が明らかになった。また当局は、日系人の「アメリカ化」や「民主主義」的な施設運営をめざしたが、その住環境は現実的には「一般的アメリカ人」のものとは程遠いものであったことが明らかになった。

日系人の収容施設での住環境への適応と生存戦略としては、住居の改築、当局への改善交渉、居住・生活空間での「日本文化」の創造などが行われていた。つねに監視下にあり、プライバシーが欠如した、単調な住環境のなかで、日系人たちの積極的・戦略的な対応と絶えまない改善への努力、また「アメリカ化」という方針下での日系人の葛藤や両文化の混淆性などがうかがわれた。「危険な」敵性外国人として日系人が拘留された抑留所では、さまざまな国や地域の日系人たちが生活を共にし、ドイツ人やイタリア人との交流もあった。そのため、抑留所での住環境の体験は多様なものとなったと考えられる。また家族抑留所では、比較的「普通の」住環境が提供されており、家族生活における住居の形態や設備の重要性をあらためて認識することとなった。

『グローカル天理』メール配信のご案内

当研究所では、『グローカル天理』を毎月発行し、関係各所やご希望の方々へ配布・配送しておりますが、ペーパーレスでのメール配信を開始しました。

つきましては、『グローカル天理』（PDF版）のメールでの受け取りを希望される場合、および紙版の『グローカル天理』の配布・配送を中止される場合は、下記の当研究所メールアドレスへご連絡ください。

なお、当誌はおやさと研究所のホームページでも公開しており、そちらをご利用いただくことも可能ですので、併せてご案内いたします。

皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

連絡先：
天理大学附属おやさと研究所
E-mail：glocal@sta.tenri-u.ac.jp
URL：https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html

グローカル天理
第22巻　第7号　（通巻259号）
2021年（令和3年）7月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒632-8510　奈良県天理市杣之内町1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp
印刷　天理時報社
Printed in Japan